会員だより

万博に四つの太陽の塔

戦後最大のイベントは世界より6,421万人が訪れた吹田万博だと言われていますが、今も思い出に残っている方は多いと思います。

1970 年に開催されて早や50年も経ちました。

太陽の塔の正面
「黄金の顔」と「太陽の顔」

2018 年改修された太陽の塔の内部を見学して、あらためて新鮮さを感じました。

当時私達家族は海外赴任で、手紙や新聞でその感激を知らされるばかりでした。さぞかし芸術家岡本太郎氏の才能と堺屋太一氏の抜群の企画性が大きかったのでしょう。

今回見学して、太陽の塔は三つの顔を持っていると言われていますが、実は四つの顔を持っているとわかりました。いつも前から見るトップの黄金の顔は「未来」、お腹に付いている顔は「現在」、背面の黒い顔は「過去」を表し、岡本太郎氏は「人間の身体と精神が輪廻している」と考えていたからだそうです。

太陽の塔の背面
「過去の顔」

地下入り口・根源

第４の顔 地底の太陽

今回太陽の塔の後ろのスロープから地下に入りました。

すると心積もりもない間に「地底の太陽」が現れました。

それは金色に、赤色に、紫色と変化し、そのバックに世界の仮面や神像、抽象映像等が現われ、「過去・根源の世界」を表現しています。

生命の樹

次に１階に行って、上部を見上げると、41ｍの巨大造形〈生命の樹〉がそびえています。

単細胞生物から哺乳類そしてさらに宇宙へ人間が飛び出していきます。その中のどの時代にも生命のエネルギーが満ち満ちています。

もし岡本太郎氏が今も生きていれば、コロナ菌もエネルギーの一つに取り込んだかも知れません。最新のニュースでは女性や子どもへの暴力をなくす運動の取り組みとして、紫色にライトアップされているとか、「太陽の塔」さん、夜までご苦労様です！

記・写真：上村サト子

京都独特の風情ある祇園の散策路

京都には多くの散策路がありますが、11月「わがまち紹介」で祇園の「漢字ミュージアム」を見学し、昼食後祇園特有の風情ある町並みを散策することにしました。

切り通り

祇園の「切り通り」は、四条通りから白川南通りまでのわずか150ｍ程度の小道です。

寛文年間（1661～73）公許の郭として正式に開かれた祇園町の内外六町を横断する為、花街として、もっとも栄えた通りの一つでした。戦後になると、それが災いして廃業したお茶屋跡にビルが乱立し現在はビルの間に京町屋が挟まって建っているという通りです。しかしながら、祇園の中では比較的古い通りですので、現存するお茶屋や置屋、料理屋は歴史のある所が多くあり、京の鯖寿司の「いづう」などその一つです。

夜の賑わいは昔と変わらず続いているようで、今回昼食をとった「京都拉麺信長 祇園店」では、11月から午前３時まで営業しているとの事でした。

末吉町通りを過ぎると、白川南通りへ至る僅か20ｍの部分は急に大人３人が並ぶのがやっとの狭路となり、通りの風景が一変します。アスファルト道路が石畳となり、格子窓と犬矢来の美しい京町屋がならんだ素晴らしい景観となります。ここに来るといつも着物姿の方が多く散策しています。

巽橋（たつみばし）
祇園の中でも
特に風情ある場所

巽橋あたりは映画やCM撮影のメッカでご覧になった方も多くおられると思います。

巽橋を渡ると「辰巳大明神」があり、地域の人々の信仰を集めています。

辰巳大明神
芸妓や舞妓が
芸事の上達を願う神

お茶屋が多いことから芸舞妓さんを多く見かけます。

この通りは観光人力車も多く通ります。

また、桜のシーズンにはライトアップもされ、「京都の桜」を楽しめます。

かにかくに 碑
かにかくに 祇園はこひし
寝るときも 枕のしたを
水のながるる

白川南通は、祇園・白川沿いの京情緒あふれる散策路です。石畳の道にお茶屋が立ち並ぶ風情のある通りで、一筋北の新橋通とともに、国の重要伝統的建造物群保存地区に指定されている。明治の歌人吉井勇の「かにかくに碑」もこの通りにあります。

白川南通
朱色の玉垣が彩る石畳の道

記・写真：大岡成一